

八ヶ岳山麓の縄文文化

今から約5千年前。雄大な自然を舞台に特徴的な縄文文化が、霧ヶ峰山麓・八ヶ岳山麓で繁栄していました。今回はその歴史をご紹介します。縄文の「ビーナス」の発掘に携わっていた縄文文化の研究者であり、茅野市尖石縄文考古館の館長を務める守矢昌文さんにお話を伺いました。

信州最古のブランド品、キラキラ輝く黒曜石

霧ヶ峰山麓の和田峠周辺は、縄文時代に本州最大の黒曜石の原産地として栄えていました。東日本と西日本、日本海側と太平洋側を結ぶ日本の中心的な場所に位置していることも相まって、全国各地の集落と盛んに交易が行われていました。近年、蛍光X線と黒曜石の性質を詳細に分析できるようになり、その結果から産地が断定できるようになったことで、霧ヶ峰山麓で産出した黒曜石は北は北海道、西は三重県まで運ばれていたことがわかっていきます。和田峠周辺の黒曜石が各地に行き渡ったもう一つの理由として、「ブランド化」し

二点の国宝「土偶」それぞれの魅力と文化

今から約5千年前、縄文時代中期に製作されたとみられる国宝「土偶」二点「縄文のビーナス」。前に突き出た乳房と下腹部、左右に張り出した臀部など妊婦を思わせる造形をしており、世界の土偶の特徴と共通する「土偶＝女性像」が視覚的にはつきり表現されています。顔は、切れ長で吊り上がった目におだんごばな、小さなおちよばぐちという八ヶ岳山麓の土偶特有の愛らしい風貌です。

それから1千年後にあたる縄文時代後期に、国宝「土偶」仮面の女神が製作されたとみられます。その胴体には渦巻きや同心円、たすきを掛けたような文様が描かれ、顔面は逆三角形の仮面を付けたような造形をしており、呪術師やシャーマンを表現していたのではないかと言われています。縄文のビーナスが製作された頃は気候も暖かく「縄文パブル」を思わせる豊かな時代だったとされ、反対に、仮面の女神の時代は寒冷化で人口も減り、厳しい時代だったと推察されています。二つの土偶を見比べることで、社会背景の違いもみえてくる面白さがあります。

遺跡の数イコール人口？

縄文時代の八ヶ岳山麓周辺の人口に関して、様々な説があります。230箇所以上もの多くの縄文遺跡が見つかったことから、縄文時代中期には本州で最も人口が集中した地域であったとされる説も

ていた可能性が考えられます。この地域の黒曜石は余計な混入物が少ない優れた品質の物が多く、細かい石器（矢じりや刃物など）を作るのに適していました。また、透明度が高い純色を帯びていて、キラキラと輝く美しさも兼ね備えていたのです。

霧ヶ峰山麓を含めた中央高地で産出された信州産黒曜石は、そのような特性から信州最古のブランド品と考えられています。それに加えて微細な加工が施された和田峠周辺の矢じりは、諏訪地域の物作りの原点と言えるのかもしれない。

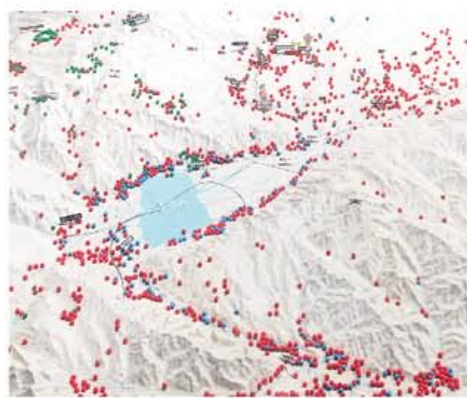
ユニークで過剰なほどの装飾が施されている縄文土器

縄文時代の物作りのピークである中期、

ありますが当時の人口を正確に把握するのは難しく、遺跡がたくさんあるからといって同様に人口も多かったとは単純には明言できないところがあります。例えば、四季毎に「春の村」や「冬の村」として移動していたと仮定した場合、住居はどんどん増えていきます。「一世帯で複数の家を持つていた可能性」を検証することは難しく、当時の人口論というのはどうしてもあやふやな部分が多くなってしまっているのです。

しかし、この地域は前述したとおり遺跡が多く、他の地域の遺跡に比べて発見される家の数が多いこともまた事実です。「何故遺跡が多いのか、どうして村が大きくなったのか、そこには他の集落にはない理由、例えば黒曜石の存在が大きく関わっているのではないのでしょうか。これからの研究を続けて、その理由を解き明かしていきたい」と守矢さんは意気込みを話してくださいました。

縄文時代と現在の結びつき



八ヶ岳山麓周辺の縄文遺跡の分布模型(赤ピン部分)

国宝「土偶」(仮面の女神) 縄文時代後期(約4000年前) 中ッ原遺跡出土



国宝「土偶」(縄文のビーナス) 縄文時代中期(約5000年前) 棚畑遺跡出土



八ヶ岳山麓では変化に富んだ立体造形や精緻な装飾が施された土器文化が発達しました。土器の縁に顔の形や蛇の形の把手が付いたり、抽象的な模様や縄文が器の空間を埋め尽くす程に装飾されていたりします。煮炊きするだけの道具としては過剰なほどに装飾され、様々な形を持っていました。

八ヶ岳山麓の雄大な自然の中で、機能性を重視しない自由でユニークな発想が育まれていたのかもしれない。一点、一点時間をかけ丁寧に作られた土器は、効率と生産性を優先的に考える現代の社会とは逆行しており、そういった背景からも当時の人の精神性や物作りに込められた強い想いが感じられます。

縄文時代の文化は、今の私たちの暮らしの基層となっていると言われています。縄文文化を知るとき、それは同時に私たち自身を知ることもあるのです。

私たちの暮らしている地域には、多くの縄文文化の資料が溢れています。ぜひ縄文文化に触れ、縄文時代と私たちの時を超えた繋がりを実感してみてください。

黒曜石(石核) 縄文時代前期前半 高風呂遺跡出土



黒曜石(矢じりの製作途中に出る石くず・剥片・砕片)



中空把手に似た突起状装飾のある土器 縄文時代中期前半 棚畑遺跡出土



中空の把手のある土器(長野県宝) 縄文時代中期前半 長峯遺跡出土



蛇体把手付深鉢形土器(長野県宝) 縄文時代中期前半 尖石遺跡出土



深鉢形土器 縄文時代中期前半 尖石遺跡出土



蛇体装飾把手付土器(長野県宝) 縄文時代中期前半 梨ノ木遺跡出土



顔面把手付土器(長野県宝) 縄文時代中期前半 梨ノ木遺跡出土



尖石縄文考古館 館長 守矢昌文さん

今後について、「当時無事に何人住んでいたか、中部地域で縄文文化が花開いたのはどうしてなのか、デコレーションされた土器が沢山出土するのはどうしてなのかなど、様々な解釈はされているもののその理由はまだ研究途上にあります。多くの遺跡と資料が残されているこの地域の特性を生かして、それらを徐々に解き明かし、そしてそれを伝えていく使命を全うしたいです。」と熱い思いを語ってくれました。

info 茅野市尖石縄文考古館

縄文時代では日本で最初に特別史跡に指定された「尖石遺跡」の出土品をはじめ、国宝土偶「縄文のビーナス」「仮面の女神」や、八ヶ岳山麓の縄文遺跡から発掘された2000点余りの考古資料を展示しています。縄文の行まいを今に伝える貴重な場所。

観覧料 個人：大人500円・高校生300円・小中学生200円
団体(20名以上)：大人400円・高校生200円・小中学生150円

開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)

ホームページはこちら

休館日 月曜日(休日の場合を除く)、年末年始(12/29~1/3)、
休日の翌日(この日が休日・土・日曜日の場合を除く)

〒391-0213 茅野市豊平4734-132 ☎0266-76-2270

